

研究成果情報

令和3年度

多収性品種「ちほみのり」、「つきあかり」、「あきあかね」、「みずほの輝き」の収穫適期		
[要約] 出穂後積算気温による収穫適期は、「ちほみのり」が 1,050～1,200℃、「つきあかり」が 1,100～1,200℃、「あきあかね」が 1,150～1,300℃、「みずほの輝き」が 1,050～1,200℃である。		
新潟県農業総合研究所作物研究センター 栽培科	連絡先	TEL 0258-35-0836 FAX 0258-35-0021

[背景・ねらい]

業務用途の多収性品種の生産が拡大する傾向にある。多収性品種を市場に安定供給させるためには、実需者が求める品質を満たすことが大切である。そのためには、高い品質が確保できる時期に収穫作業することが重要である。また、収穫適期は生産者の作業計画立案の際に重要な目安となる。そこで、県内の主要な多収性品種について、高い品質を確保できる収穫適期を示す。

[内容]

- 1 収穫適期は、整粒歩合が最大になる時期(最大値から1%の低下範囲を含む)とする。その出穂後積算気温および黄化割合は、「ちほみのり」が 1,050～1,200℃・85%以上、「つきあかり」1,100～1,200℃・90%以上、「あきあかね」が 1,150～1,300℃・90%以上、「みずほの輝き」が 1,050～1,200℃・90%以上である(図、表)。
- 2 「ちほみのり」及び「みずほの輝き」は、比較的早い時期から黄化割合が高まり、出穂後積算気温 1,000℃時点で青未熟粒が 10%以下となる。また、白未熟粒や胴割粒の増加が緩やかであることから、収穫適期の幅が広い(図)。
- 3 「つきあかり」は、出穂後積算気温 1,000℃時点では青未熟粒が 10%以上と高い。収穫適期を過ぎると胴割粒が急激に増加する(図)。
- 4 「あきあかね」は、出穂後積算気温 1,000℃時点では青未熟粒が 10%以上と高い。収穫適期を過ぎても胴割粒の発生は少なく、整粒歩合の低下は小さい(図)。

[導入効果]

多収性品種の収穫適期が明瞭になり、高い品質が確保される。

[導入対象]

多収性品種の生産者及び栽培指導者

[留意点]

- 1 本成果は、平成 30～令和2年に作物研究センター内ほ場(細粒質グライ土)で、5月 10 日頃の移植、化成肥料総窒素施肥量(基肥+穂肥) 13kg/10aで栽培したデータを用いた。
- 2 極端な早植えや遅植えへの適用性は未確認である。
- 3 フェーンや高温によって、収穫適期以前でも胴割粒が増加する可能性がある。気象に応じて刈遅れないよう注意する。

[具体的データ]

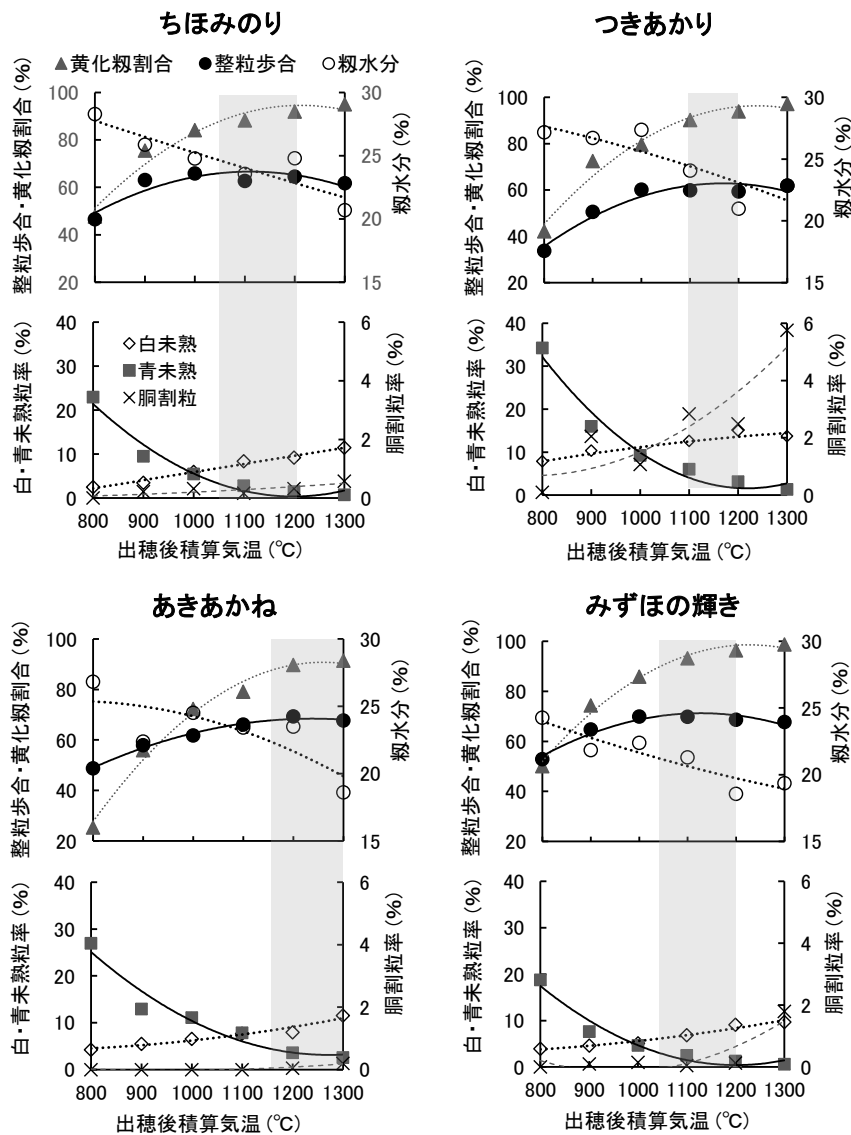


図 出穂後積算気温と黄化歩割合、籾水分、玄米品質の関係

注 網掛けは収穫適期。整粒歩合が最大の時期（最大値からの低下が1%以内の範囲を含む）。

表 収穫適期の出穂後積算気温と黄化歩割合

品種	出穂後積算気温 (°C)	黄化歩割合 (%)
ちほみのり	1,050~1,200	85
つきあかり	1,100~1,200	90
あきあかね	1,150~1,300	90
みずほの輝き	1,050~1,200	90

[その他]

研究課題名:業務用米に適した多収性品種の安定多収栽培技術の確立

予算区分:県単政策(21世紀型)

研究期間:平成30~令和2年度

発表論文等:なし